

平成 22 年 5 月 17 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2008～2009
 課題番号：20720064
 研究課題名（和文） 戦前期日本を中心とする サラリーマン の表象研究：日本モダニズム論再考
 研究課題名（英文） Cultural Interpretation on Representation of Salaried Men in Modern Japan
 研究代表者
 鈴木 貴宇（SUZUKI Takane）
 早稲田大学・オープン教育センター・助教
 研究者番号：70454121

研究成果の概要（和文）：本研究は2008年度から2年間にかけて行われ、各年度における研究成果は次の通りである。【2008年度】映画や出版といった都市大衆文化が開花した1920年代以降の「サラリーマン」表象を、主に雑誌『サラリーマン』を中心に抽出作業を行った。また戦後の高度成長期における「サラリーマン」の心情分析を、山口瞳による小説『江分利満氏の優雅な生活』に描かれた戦中派のサラリーマン表象から行った。【2009年度】文献調査の深化を引き続き前期で行い、後期では米国メリーランド州立大学図書館、プランゲ文庫を訪れ、同図書館所蔵の占領期に撮影された写真から、東京における「サラリーマン」の姿が戦後の大衆的表象へと連なる過程を調査した。

研究成果の概要（英文）：In the year of 2008, to define the representation of salaried men from popular culture, such as movies and magazine, this research is concentrated on collecting the articles about salaried men in journal *Salaried Men* (published in 1928). To abstract the collective sensibilities of salaried men in post war Japan, the novel *Mr. Everyman's Elegant Way of Life* (1962) by Hitomi Yamaguchi, is chosen and analyzed. In the year of 2009, the research on literature is developed, and also to find the process of continuity between the representation of salaried men in post war period and that of pre war period, the researcher visited the Prange Collection in University of Maryland, U.S.A., which is specialized in the collection of both written and visual materials published in occupied Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、日本文学

キーワード：近・現代文学（E）

1. 研究開始当初の背景

本研究は日本近代文学を主要な専門領域とするものであるが、文学作品のみならず、雑誌に掲載されたイラスト、また都市風景を構成する建築のデザインなど、さまざまな視覚資料を参考に分析を行う学際研究に基づいている。

こうした研究関心は、1980年代に多大な成果を見た「日本モダニズム研究」によって醸成された。同研究は、従来の歴史観では注目されることの少なかった1930年前後の日本社会を「都市大衆文化」の開花期としてとらえ、またそこに戦後の民主化に続く、市民社会の萌芽を見た。ある特定の時代に生きた人々の集合的心理を抽出すべく、特定の学問分野にこだわらず、積極的な越境を行った。

本研究は、こうした日本モダニズム研究の開拓した学際性に基づき、主に文学的言説と文化的表象（イラスト、写真）の両者を対象に、日本の近代化を担った社会階層であるサラリーマンがいつ誕生し、そして戦後の大衆化にいたる過程を考察しようとした。

今日では極めて日常的な存在として認知されているサラリーマンであるが、研究開始当時はその用語の起源、また戦前と戦後での社会的地位の変容などは明らかにされておらず、この点を明らかにすることで「中産階級」が日本の近代においてどのように描かれてきたか、が明らかにされると考えた。本研究が基点とする1920年代とは、日本社会において従来の農村社会とは異なる文化、生活様式が出現しており、それは急速な工業化と都市化現象によってもたらされた。その様子はすでに1960年に社会学者、高橋徹による論稿「都市化と機械文明」(『近代日本思想史講座 6』筑摩書房)が概括を行い、そこでは「故郷喪失」の感覚が、1920年代の文学状況を特徴づける「新感覚派」の作品から抽出されていた。

しかし、1920年代当時から近代化の担い手とされた「モダン層」(大宅壮一)すなわち資本家と労働者の中間に位置する「新中間層」と、その社会的表象であるサラリーマンに着眼した本格的な研究は着手されていない。本研究はその端緒となるべく開始された。主な先行研究としては南博『日本モダニズム研究』(1981)、松山巖『乱歩と東京』(1984)、海野弘『モダン都市東京』(1982)、磯田光一、前田愛による論稿が挙げられる。

2. 研究の目的

本研究は申請者の博士学位論文の内容と連動しており、その基礎的研究はすでに2004年に執筆した論文、「青空と自殺：1930年前後のサラリーマン 試論」(『大衆文化の領域』2005年所収)また2005年に執筆した論文「忘却の記憶：菊田一夫『君の名は』における「東京」の二本にて行った。

前者では昭和初頭のモダニズム期におけるサラリーマン表象を主に浅原六郎による小説から分析し、後者では戦後初の大ヒットとなったメディア・ミックス作品、『君の名は』(1952)に描かれる男性像に着眼し、それが高度成長以降にサラリーマン家庭の象徴として浸透する「核家族」のイメージを先行して表現していることを指摘した。

本研究では上記の知見を基に、さらなる深化を目的に、山口瞳の直木賞受賞作品である『江分利満氏の優雅な生活』(1962)と、戦後の出版ブーム期に人気を得たジャンル、「サラリーマン小説」の代表的書き手である源氏鶏太の作品を基軸に据え、戦前に誕生したサラリーマン表象が、高度成長を迎えて大衆化する過程を連続的に考察することを目的とした。

また、すでに教育社会学者の竹内洋、ドイツ文学者の高田理恵子の両名によって、近代日本における知識層の問題が提示されているが(竹内『立身出世主義』、高田『文学部という病』)、本研究は両者の成果を参照しつつ、当初は知識層の表象であるインテリゲンチヤとの相関性がサラリーマンも非常に高いこと、関東大震災を経て大衆的な浸透をこの用語がみる理由は、1917年のロシア革命成功によって誘導された社会主義思想の流行が関連しているのではないかと、という2点を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は各年度において次の方法で進められた。

(1) 2008年度

昭和戦前期に発表された文学作品の再考

吉行エイスケ、浅原六郎、久野豊彦の3名は、1930年前後に「新社会派」という名称で共同制作を試みた。特に久野は経済社会を文学の中にどのように描写するかをテーマとしており、また浅原六郎

は自身が大学卒業後に出版社へと勤務した経験から、青年サラリーマン層の心理と流行を活写した作品を多く残している。こうした作家の作品選定と整理を行った。
山口瞳『江分利満氏の優雅な生活』にて描かれた戦中派のサラリーマン表象の成立過程を明示化



図

図



まず、本研究の出发点となったサラリーマン表象を提示する(図)。昭和初期から活躍した漫画家、長崎抜天による漫画「佐良利さん」(1928年)である。当時の流行であったロイド眼鏡に、ラップズボン(ラップズボンを身にまとった図)は、サラリーマンとモダンボーイが隣接表象であることを伝えるが、

興味深いのはそれから敗戦をはさんで30年後に登場した「江分利満」(図)の姿が、ほぼ「佐良利さん」と変わらない点である。本研究は、山口瞳の同作品にて展開される心情が、戦中派の世代に特化している点に着眼し、高度成長のサラリーマンを代表する「江分利満」の背景に控える戦前のモダニズム文化を指摘した。具体的には同作品の登場人物の来歴を年表化し、現実社会の出来事との対応を見る方法を採用した。

(2) 2009年度

引き続き文学作品を対象に、サラリーマン表象の成立を考察

当該年度は明治、大正期(1910年代)を中心に行った。近代文学史との照応をはかるため、二葉亭四迷による初の言文一致体小説「浮雲」分析を試みた。同作は「官吏」の職を失った青年、内海文三が主人公であり、民間企業が定着する以前の主要なサラリーマ

ン層であった「官吏」表象を分析するにあたって重要と考えたためである。また、大正期に入ると、日本資本主義体制が定着を見たことと連動して、いわゆるサラリーマン家庭が都市を中心に増加する。専業主婦の妻に会社勤めの夫、という戦後に一般化する夫婦像の原型がこの時期に登場を見るようになり、当時の主婦を多く読者とした雑誌『主婦の友』にはサラリーマン家庭の日常をユーモラスに描いた佐々木邦の小説が人気連載として掲載されるようになる。大正期におけるサラリーマンの居住形態として表象される「文化住宅」が、どのように描かれるかを具体的に見ていくため、佐々木邦の作品を対象に分析を行った。

米国メリーランド州立大学プランゲ文庫所蔵雑誌および写真資料の分析



図 プランゲ文庫所蔵

日本社会におけるサラリーマン表象の成立を考える上で重要なことは、戦前に登場したサラリーマンと、戦後に大衆化し一般化するサラリーマンの間に、どのような変容が社会構造的、また文化表象的

に見られるのか、という点であろう。とくに、両者の間には第二次世界大戦による敗北という歴史的イベントが横たわっており、そこからの復興という目的を担った戦後のサラリーマン表象の成立を見るためには、敗戦直後から占領期(1945~1952)の資料分析が不可欠である。事実、1948年には『ニューサラリーマン』(図)というタイトルの雑誌も創刊されており、戦前のサラリーマン表象がどのように連続したのか、という疑問が浮上しよう。

本研究では、こうした疑問を明らかにするため、占領期の出版物に特化したメリーランド州立大学プランゲ文庫所蔵の雑誌、写真の訪問調査を当該年度の夏と冬に行った。

4. 研究成果

(1) 主な成果

2年間にわたる研究の結果、多くの研究者が疑問としながらも、明確な結論が出ていない問題、すなわち<サラリーマン>という用語がいつ登場したのか、に対して、暫定的ながらも回答が見えてきたことを第一に挙げたい。先行研究の中では、教育学研究者の竹内洋が1918年に発表された北沢楽天による漫画(図4)を例証として、遅くとも第一回メ



図4
一デーが行われた1920年には浸透していたと指摘した。

一デーが行われた1920年には浸透していたと指摘した。

本研究はこの成果を受け、新聞の見出し調査を行った。その結果、次のことが判明した。(表1)

下記の表は関連用語一覧と、朝日新聞東京版

における初出年度、また各年度における見出しの数を示したものである。表1

用語	初出	1879-1926	1926-45	1945-89
サラリーマン	1924	3	253	1378
知識階級	1917	232	252	9
俸給生活(者)	1903	75	87	3
月給取	1900	29	19	15
中間階級	1920	6	2	2
インテリゲンチャ	1917	10	33	1
中流階級	1917	51	3	6
プロレタリアート	1918	307	746	120

* 使用ソフトは朝日新聞データベース「聞蔵」

網掛けを施した部分は、各用語例が最も多く見られる年度である。新聞にて使用されることは、社会での認知度が定着した指標と見て差し支えないだろう。「サラリーマン」が戦後に大幅な増加を見るのは、人口構成率の増加と一致によるもので、むしろ注目すべきは、明治、大正時代にあってはわずか3件しかなかった使用が、昭和に入って急激に200件を超えている点である。この時期に「プロレタリアート」、「インテリゲンチャ」、「知識階級」といった、1917年のロシア革命によってもたらされたマルクス主義に関連した用語も増加を見ていることがわかる。これは、労働者でありながら「プロレタリアート」との差異を含意するものとして、「サラリーマン」が前景化してきたことを示すものであり、戦前期の<サラリーマン>を考える上で、マルクス主義の文脈が重要であることを明示化するデータと云える。暫定的な結論ではあるが、戦前における<サラリーマン>とは、政治的な実際運動をためらう<青白きインテリゲ

ンチャ>と同義の表象として機能していたと考えられる。この点に関しては、1930年前後に書かれた小説作品の分析と併せて継続研究を行っている。

本研究は、国内にとどまらず、後発の近代化を遂げた東アジア諸国の産業構造と、その反映としての文化的表象を考えるにあたって、貢献する点が多いと思われる。アメリカの政治ジャーナリスト、K.ウォルフレンはかつて自著の中で「日本社会におけるサラリーマンとは、職種ではなく一つの規範である」(『日本/権力構造の謎』)と看破しており、<サラリーマン>表象の成立過程を明確にすることは、そのまま日本社会の近代化過程を浮き彫りにすることに他ならない。

今後の研究展望としては、戦後に日本社会は「一億総中流」(大宅壮一)と揶揄されるまでに経済的格差の見えにくい成長を遂げたが、その時に規範とされた階層は<サラリーマン>だったことを踏まえ、「総中流化=サラリーマン化」していく過程と風景の変容を中心に研究を行う。安定した社会の指標として「中流」が求められたと考えられるが、その背後には第二次世界大戦での敗北と、廃墟が立ち並ぶ風景があった。そして、戦後の高度成長を担った<サラリーマン>たちの多くは、戦中期に「兵士」として、非日常の極地である戦争に加担していたことを忘れてはならない。こうした状況をよく示す資料が、プラング文庫に所蔵されている占領期の写真である(図5, 6, 7)。



図5
渋谷駅での求人情報に集まる人々(1948)



図6
東京駅八重洲側の廃墟(1949)



図7
戸山ハイツ(1949)

図5は、復員間もない男性たちが求人情報に集まる様子を撮影したもの、図6は後に日本経済を担う「サラリーマン」たちが往来する復興の場となる東京、八重洲界隈、図7は住宅不足の解消として建設された戸山ハイツの写真である。戦後日本社会の繁栄を築いてきた者は、大会社の名のある人物たちではなく、ここに映りこんだ無名の「サラリーマン」たちである。そして戸山ハイツが米軍の放出資材によって建設されたように、戦後の日本社会に生きた人々の欲望は「豊かなアメリカ」に並ぶことと、その生活様式の模倣であった。後に「社畜」と軽蔑され、没個性の象徴のように扱われる「サラリーマン」であるが、そうしたマイナス・イメージの成立過程を追うことは、戦後の日本社会を文化的側面から考察することにもつながる意義をもつと思われる。

2年間の研究期間は終了したが、本研究は引き続き継続しており、数年のうちに博士学位論文として単著刊行を目標としている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

(1) 鈴木貴宇「因習から遠く離れて：今和次郎とバラック装飾社」、『1923 関東大震災報告書【第3編】』、査読無、p108、内閣府事務局中央防災会議、2009年。

〔学会発表〕(計2件)

(1) 鈴木貴宇「1930年代の銀座における巴里への憧憬：雑誌『あみ・ど・ぱり』と巴里会」、神奈川大学非文字資料研究センター公開シンポジウム、神奈川大学、2009年10月31日。

(2) 鈴木貴宇「江分利満のモダニズム：山口瞳『江分利満氏の優雅な生活』からサラリーマンを考える」、日本近代文学学会例会、東京大学本郷キャンパス、2008年6月28日。

〔図書〕(計2件)

(1) 鈴木貴宇『ライブラリー日本人のフランス体験 第3巻：パリへの憧憬と回想「あみ・ど・ぱり」』(単編著)、pp1-641、柏書房、2009年7月。

(2) 鈴木貴宇「見えすぎた眼の詩人、中桐雅夫」、和田博文編『戦後詩のポエティクス』所収、pp229-243、世界思想社、2009年4月。

〔その他〕

ホームページ等

早稲田大学 研究者データベース

<https://www.wnp7.waseda.jp/Rdb/app/ip/i>

6. 研究組織

(1) 研究代表者 鈴木 貴宇

(SUZUKI Takane)

早稲田大学・オープン教育センター・助教
研究者番号：70454121

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし